

序にかえて

私は加賀能登越中三ヶ国の国境三国山に近い山村の小さな真宗寺院に生れた一人子であった。父は一生この寺の住職であったが読書好きで講義録や雑誌や書物を次々に購読していた。哲学館（東洋大学）の仏教講義、哲学講義、真宗大学の「無尽燈」「求道」「精神界」も久しく読んできて購読した。其の思想は中々進歩的で教学の振興を念願するところから常に革新的運動に同情し共鳴していた。寺門の経営に注意するとともに地方の発展、開発にも留意していたので、人材の輩出するのを深く喜び援助、激励を惜しまなかった。地方寺院の教化事業推進のために同志とはかって仏教護法会と云う組織を結成し、私の四歳の頃、その発会式を明治二十二年に自分の寺を会場に挙行した。此の組織は今日に至るまで存続している。

小学校在学中に得度式を受けるため父に伴われて京都にのぼった。私は一人子であったので、私の教育と養護のためには、父母は容易ならぬ苦勞をしたのである。特に尋常四年の時得度式

の帰り頃から、眼病（角膜実質炎）にかかり、三ヶ年に亘って母の看護の下に病院生活をして治療に努めたが、十分視力を回復することのできないまま小学校に再び就学した。この小学校在学中に井上円了博士と平松理英師とが寺に来られたことを記憶している。

小学校を眼病に悩みながら終えると父母の膝下を離れて県立七尾中学校に一年でも二年でもと父母とも申し合せて入学したが、そのまま五ヶ年間卒業まで在学した。校長奥田頼太郎先生や、今日なお御健在で、御指導下さる高柳竹四郎先生等の教導を受けた。中学在学中色々の書物を読み、様々の思想にも触れたけれども、中学入学の当初から「精神界」を月々父から送ってもらって始めから終りまで精読するのが何よりの楽しみであった。中学を卒えたら東京に出て浩々洞に入り洞生活をしたいと夢を抱くようになった。中学四年の時、清沢先生が逝去されたことを知った時は悲痛の思いであった。友人の誘いもあって高校の入学試験は金沢の四高で受験しながら第一志望は一高としておいた。これは視力も不十分故、必ずしも入学するのでなく、受験だけすると父にもいつてのことであった。しかし一高から入学許可書が来ると一年だけでもと父母に頼んで東京遊学の準備をし、一方門徒の方々も学資の一部を負担して下さることになった。然しこの門徒の方々からの学資負担は心苦しいからやめてもらいたいと勝手なこ

とを父母に申出たところ、父母は快く之を承知して貧しい生活の中から私の学費はこれから全部父から頂いたことであつた。

一高では三年間とも寮生活をしたが、近角先生や浩々洞の暁烏先生、多田先生、佐々木先生等の講話を聞き廻つた。殊に二年からは、徳風会の月次の会合の世話をするのに忙しい思いをしたことであつた。大学に入ってから、安富成中、木場了本等の諸君とともに富岡教雲師を中心とする大谷派寺院関係の同志で寮をつくつて寮生活をした。大学二年を終つた年が明治四十三年で、宗祖聖人の六百五十回忌を迎える前年で、句仏上人の北海道樺太沿岸御巡化のことがあり私も汽船千賀丸に陪乗して一ヶ月有るに亘つて此の行を共にした。

明治四十四年大学の業を卒えたが、私は依然父から生活を支えて頂いて居た。然るにその翌々年大正二年十一月一日父は急逝された。今年父歿して五十年、母世を去りて二十三年、私は徒らに七十七歳の年を迎えた。誠に墓側に佇んで感慨無量である。

37・9・24

谷内正順